第１期「自分ごと化会議 in 松江」顛末記

―実践的ミニ・パブリクス論序説

毎　熊　浩　一

島大法学第64巻第１・２号抜刷〔論説〕

2021年３月

第１期「自分ごと化会議in松江」顛末記
―実践的ミニ・パブリクス論序説

毎　熊　浩　一

はじめに―対象・方法・内容

脱稿直前、たまたま読んでいたレポート入門書のくだりに目が留まった。「タイトルに含まれるべき情報は、次の三つ」[1]とある。対象、方法、内容である。本稿の題目にも含ませてみた。それぞれ敷衍しておこう。

まずは対象。主題に記す通り「自分ごと会議 in 松江」（以下、JGKと略）である。ここで「自分ごと化会議」とは、その産みの親[2]「構想日本」によれば「それまで政治家や公務員任せにしていたことを住民（国民）が直接話し合う会議で（あって）…カギとなるのは、参加する住民（国民）を無作為に選ぶこと」である[3]。「in 松江」とは今回のプロジェクト（以下、PJと略）の舞台に他ならない。すなわち、無作為抽出により選ばれた松江の住民21人――正確には、これに島大生５人が加わり都合26人――が集まり、原発をテーマに協議したのである。期間は2018年からその翌年まで。メインとなる「協議会」は11月からおよそ月１のペースで計４回実施された。特徴（長）の一つは、市民による主催だったことである。構想日本を含む民間団体からなる実行委員会が企画運営したのであった。なお、本稿執筆時点では既に自然エネルギーをテーマにした新たなPJが進行中である。これを第２期という[4]。タイトルに「第１期」と記したのはこのためである。

次いで方法。端的に「顛末（の）記（録）」である。社会科学方法論でいえば、参与観察の類に属すといえよう。ただし、これにはいくらか留保が要

1　都筑学『大学１年生のための伝わるレポートの書き方』有斐閣、2016年、70－71頁。
2　「自分ごと化会議」は構想日本の登録商標（第6049269号）である。
3　http://www.kosonippon.org/project/jibungoto1/ただし、括弧内、引用者。
4　第２期については、さしあたりブログ「自分ごと化会議 in 松江～自然エネルギーってどげかね？～」参照。https://ameblo.jp/jibungotokakaigi/

る。社会学者の佐藤に倣い参与観察者の役割を大きく４分類[5]するならば、本研究の立場は「完全なる参加者」か「観察者としての参加者」に近い。だが、厳密にみれば、筆者は自身の立ち位置を隠した「スパイのような存在」[6]であったわけでもなければ、「もともと調査を目的として、その現場にい（た）」[7]わけでもない。はやい話、PJ当事者であった。具体的には、実行委員会の共同代表であり、かつ、小職の主宰する島根大学行政学研究室（以下、ゼミ）は学生事務局を務めてもいた。そのため、通常の参与観察者では得られないであろう情報を扱えるし、ここでもその利点を活かし「分厚い記述」を意識している。だが他方で、一定の――少なくとも無意識レベルでの――当事者バイアスは免れ得ないであろう[8]。この点とくに留意されたく、本論ではあえて一人称――「僕は…」[9]――で語り、むしろ当事者性を際立たせることとする。

最後に内容。既述部分から概ね明らかであろうが、副題の解説がまだ残されている。そこに示す通り、本稿は「ミニ・パブリクス論」に属すものでもある。ここでミニ・パブリクスが「比較的少人数の市民によって構成される熟議のためのフォーラムの総称」[9]であるとするならば、JGKが――少なくとも形式的には――それに該当することは明らかだろう[10]。本稿はこれに関する「論（説）」である。ただし、以下二つの意味において「序説」にとどまる。

5　佐藤郁哉『フィールドワークの技法：問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社、2002年、69－71頁。

6　前掲書、70頁。

7　同上。

8　無論、事実の正確さや認識の公正さ等には細心の注意を払う。また、関係者の一部には草稿段階で目を通してもらってもいる。実際、事実誤認等についての指摘も受けた。とりわけJGK共同代表の一人・福嶋浩彦――後述――にはお世話になった。記して謝意を表したい。

9　田村哲樹『熟議民主主義の困難－その乗り越え方の政治理論的考察』ナカニシヤ出版、2017年、184頁。

10　もっとも、通常求められる「社会の縮図」なる要件をJGKが満たしているかどうかについては疑問を持つ向きもあろう。20万都市の松江にあって無作為抽出で選ばれた人数はたかだか21人だったからである。しかし、この問いは単に形式だけでは判断できない。実質的な検証を要する問題である。この点も後述する「別稿」にて扱うこととしたい。

第一に――本「記録」をもとに――、いずれ別稿[11]において「検証」を行う予定がある。そこでの主たる関心は、JGKという試みが「成功」したかどうか、である。当然、しかるべき評価規準も用意される。そのあたり、改めて「おわりに」にて予告することとしよう。いずれにせよ、本稿の「記録」は単なるエピソードの寄せ集めではない。きたるべき本説の予備的作業として編まれた、その意味においてまさに序説である。

第二に――くだんの本説をもってしても――、ミニ・パブリクス論の学術的系譜における本稿の位置はさして明確ではない。この研究領域は近年とみに進展著しい。日本での動向をごく大雑把にレビューすれば、次のように整理できようか[12]。規範理論（熟議民主主義論）[13]の具現化ツールとしての紹介、諸外国を中心としたケーススタディ[14]、代表的な外国語文献の翻訳[15]、我が国での実例の蓄積とその考察[16]、熟議をめぐる実証研究[17]、理論と実証との交錯[18]、さらなる規範理論研究[19]、である。このようななか、なるほど本研究は特定の主張に論争を挑むものでもなければ、理論的な新生面を拓かんとするものでもない。

11　田中良弘編『原子力政策と住民参加（仮）』（2021年刊行予定）に所収される予定である。

12　ここでのカテゴリーは便宜的なものであって、それぞれ排他的であるわけではない。また以下に例示する研究はほんの一部、しかも書籍化されたものに限っている。

13　例えば、篠原一『市民の政治学－討議デモクラシーとは何か』岩波書店、2004年、田村哲樹『熟議の理由―民主主義の政治理論』勁草書房、2008年。

14　例えば、篠藤明徳『まちづくりと新しい市民参加－ドイツのプラーヌンクスツェレの手法』イマジン出版、2006年、篠原一編『討議デモクラシーの挑戦－ミニ・パブリックスが拓く新しい政治』岩波書店、2012年。

15　例えば、ジェイムズ・S・フィシュキン（曽根泰教監修・岩木貴子訳）『人々の声が響き合うとき－熟議空間と民主主義』早川書房、2011年、ジョン・ギャスティル・ピーター・レヴィーン編（津富宏・井上弘貴・木村正人監訳）『熟議民主主義ハンドブック』現代人文社、2013年。

16　例えば、篠藤明徳・吉田純夫・小針憲一『自治を拓く市民討議会－広がる参画・事例と方法』イマジン出版、2009年、若松征男『科学技術政策に市民の声をどう届けるか』東京電機大学出版局、2010年。

17　例えば、『レヴァイアサン』（特集：「熟議」をめぐる実証研究）第61号、2017年秋。

18　例えば、田中愛治編『熟議の効用、熟慮の効果』勁草書房、2018年。

19　例えば、柳瀬昇『熟慮と討議の民主主義理論－直接民主制は代議制を乗り越えられるか』ミネルヴァ書房、2015年、田村哲樹『熟議民主主義の困難： その乗り越え方の政治理論的考察』ナカニシヤ出版、2017年。

新たな事例の記録と検証を追加するのみである。だが、この素材――すなわちJGK――には改めて特記しておかねばならない点がある。それは専ら市民により主催されたことである。これまでの事例は、ほぼ行政主催かその委託によるもの[20]、あるいは研究のための実験[21]がほとんどであった[22]。構想日本の関わったケースだけを取り上げても、およそ９割は行政主催、残りはほぼ議会や会派によるもの、市民の手になるのは松江２ケースのみである[23]。事例の持つ学術的ポテンシャルは決して小さくないだろう[24]。無論、記録と検証をこえた分析は筆者でなくともよい。本稿は、新たな論究――本説――を期待しその素材を提供するという意味でもまた序説である。

ところで、筆者自身の研究系譜における位置も簡単に確認しておきたい。実は、冒頭の入門書の記述を目にする前までは別の題目を予定していた。「自分史の超NPM論・政治参加編－第１期『自分ごと化会議 in 松江』を題材に―」である。かつて拙稿[25]で、自らの研究の来し方行く末を「超NPM論」なる実践的概念に整理・構想した。本稿はその各論にあたるわけである。関連部分を抜粋しておこう。「NPM とは競争主義とマネジャリズムの

20　例えば、曽根らの事例研究（『「学ぶ、考える、話しあう」討論型世論調査―議論の新しい仕組み―』木楽舎、2013年）が対象とした「エネルギー・環境の選択肢に関する討論型世論調査」は、「政府の予算で行われた」（246頁）ものである。もっとも、運営は独立した実行委員会により自律的に担われたとされている。

21　例えば、脱炭素社会への転換と生活の質に関する市民パネル実行委員会『脱炭素社会への転換と生活の質に関する市民パネル報告書』2019年10月。

22　勿論すべての研究を網羅できているわけではない。実際、比較的はやい段階で民間団体による実践例がある。例えば、東京JC千代田区委員会は2005年にドイツのプラーヌンクスツェレを参考にした「市民討議会」を実施した。参照、竹間忠夫『ドキュメントJC東京ブロック協議会』アールズ出版、2006年、第５章。

23　参照、伊藤伸「自分ごと化会議in松江 事前勉強会」資料（2020年10月１日）。なお、ここで２例目とは第２期JGKである。

24　とある学会――その企画責任者は気鋭のミニ・パブリクス研究者――からJGKを題材とした報告の依頼があったことは一傍証と言えようか。もっとも筆者の都合により引き受けることはできなかった。本稿には謝罪の意も含ませたい。なお、JGKに関心を寄せる行政法研究者とは実際に共同研究の機会も得た。参照、宮森征司・毎熊浩一・田中良弘『住民参加は、原子力に関する住民の意識にどのような影響を与えるか？』（東海村「地域社会と原子力に関する社会科学研究支援事業」）2020年 ３月。

25　拙稿「自分史の超NPM論・寄付編――島根県共同募金改革を題材に」『山陰研究』第11号、2018年。

結婚である。市場は政府の介入をきらい、経営者はマネジメントの裁量を求める。そのコロラリーとして NPM には『脱政治』性向が備わっている。…NPM はいわば『被治感なき統治』という野心を持っている。これには端的に『政治参加』を対峙させねばならない。…『政治をあきらめない』ことが緊要である」[26]。このための有力な仕掛けの一つがミニ・パブリクスであり、さらにその具体的実践例がJGKなのである。それでは以下、本論に移る[27]。

１．前史

（１）登場人物

まずは主催者の組織体制と主要[28]メンバーを紹介しておこう。実行委員会を構成するのは４団体。「住民目線で政治を変える会・山陰」（以下、目線の会[29]）、「市民自治を考える会・まつえ」（以下、自治まつえ）、政策シンクタンク「構想日本」、そして島根大学行政学ゼミである。共同代表は三人体制で、大谷怜美[30]、福嶋浩彦[31]、毎熊が務めた。事務局は目線の会が担い、その長は新田ひとみ、広報・会計担当は吉岡古都である。そして、数多くの「住民協議会」[32]を手がけてきた伊藤伸（構想日本・総括ディレクター）も「自分ごと化会議コーディネーター」として名を連ねている。

26　前掲論文、３頁。

27　以下の記述にあたっては、ヒアリング（協議参加者５人と実行委員スタッフ６人を対象とし、2009年８月５-６日および９月29日に実施）、各種報道、メールやSNSでのやりとり、関係者との立ち話など様々なソースを参照した。ただし、煩雑さを避けるため原則出典は示さない。

28　ここで「主要」とは、対外的な露出度が相対的に高かったという程度の意味である。言うまでもなくメンバー全員が重要な役割を果した。以下では「主要」メンバー以外はイニシャル表記とする。

29　現在は、「住民目線・山陰ネットワーク」。

30　大谷は、目線の会共同代表であると同時に、自治まつえの代表であった。

31　福嶋は現中央学院大学教授、元我孫子市長・元消費者庁長官で、目線の会の共同代表でも構想日本の理事でもあった。

32　実は、構想日本のいう「自分ごと化会議」には二種類ある。一つはいわゆる「事業仕分け」。ここではジャッジに携わる「市民判定人」が無作為で選ばれている。いま一つが「住民協議会」であって、JGKはこちらに該当する。

【図表１　JGK年表】

2016年	11月14日	目線の会主催の伊藤・福嶋講演会で「住民協議会」が取り上げられる
2017年	７月31日	目線の会事務局会議で公式に「住民発の市民協議会」が議題に
2018年	２月３日	関係者による大刀洗町訪問
	３月30日	記者会見でJGK構想を発表
	５月30日	「実行委員会」の発足・改めての記者会見・「ミニ勉強会」
	７月２日	選挙人名簿を使っての無作為抽出作業@松江市選管
	８月３日	JGKへの参加案内を発送（締切：８月25日・９月４日）
	９月２日	「事前学習会」の開催
	９月８日	21人の参加が決定
	10月２日	学生参加者５人が決定
	11月11日	第１回協議会：基調講演・問題提起・全体協議
2019年	12月９日	第２回協議会：第１回「問題提起者」との意見交換・全体協議
	１月13日	第３回協議会：話題提供・全体協議（午前中：島根原発見学）
	２月24日	第４回協議会：「提案書」についての全体協議
	４月21日	「報告会」@くにびきメッセ
	４月～９月	「提案書」の提出：中電（４月26日）・経産省（６月21日）松江市役所（７月16日）・島根県庁（９月６日）
	７月２日	（第Ⅰ期）最後の実行委員会（第13回）
	９月29日	第Ⅱ期第１回実行委員会の開催

（２）組織的前史

JGK実行委員会が発足する前、山陰での住民協議会の実現に向けて中心的に動いていたのは目線の会であった。その事務局会議で公式に議題（「住民発の市民協議会について」）として設定されたのは2017年７月31日である。勿論この日突如とした決まったわけではない。一年弱ほどの醸成期間があった。なかでも大きな役割を果たしたのは、当時目線の会が力を入れていた講演活動である[33]。住民協議会が初めて話題にのぼったのも2016年11月に松江で行われた伊藤・福嶋講演であった。伊藤は全国の事例を紹介、福嶋がその

33　2016年の夏は参院選があった。目線の会は鳥取島根合区選挙区候補として福嶋を擁立する。しかし落選。その後、氏の提唱する「市民自治」を広げる活動として、当時すでに福嶋とつながりのあった伊藤等を招いて山陰両県各地で講演会を実施していた。

時代的意義について語った。

ところで当時の先例はほぼすべてが行政主催である。ただ唯一伊勢崎市においてのみ例外的に議会の会派が主催した例があった。福嶋はこれに意を強くし、講演会のなかで「（議会だってできるのなら）市民主催の可能性もある」と提起している。一方、吉岡はこの時点ではまだ行政に開催を要望するという姿勢だったという。が、翌年の７月12日に実施された浜田での講演を機に「市民主催」について「すっかりその気に」なる。先述の通り、目線の会の公式アジェンダとなるのはその半月後である。

当時、構想日本自体も、住民協議会推しだったようである。福岡県の大刀洗町はその発祥の地として知られるが、きっかけは「事業仕分けを４回やったら、町に仕分けるものがなくなっ（た）」とする町長が構想日本代表の加藤秀樹に相談したことにあった[34]。その加藤は、2017年８月４日に「Yahoo！ニュース」でこう書いている。「構想日本はこのような（無作為抽出による…）住民参加を『自分ごと化会議』と名付けて全国に広げていきたいと考えている。関心のある人、地域には資料の作り方や住民のための事前研修など構想日本のノウハウを喜んで提供したい」[35]。

さて、時計の針を2018年２月３日まで進めよう。目線の会および自治まつえ関係者が大刀洗を訪問した日である。事実上これが全員のやる気に火をつけた直接的な契機となった。例えば大谷は、のちに「協議会OB・OGの住民の皆さんが目をキラキラさせ…ておられる姿に感動。『ぜひとも松江でやりたい！』と思いました」[36]と語っている。そして、この訪問から約二ヶ月後、３月30日に記者会見を開き松江でのJGK開催を宣言するのである。ただし、残念なことに、僕はこの会見の場にも節目の大刀洗訪問にもいない。まだ蚊帳の外であった。

34　相川俊英『自治体職員のための住民と共につくる自治のかたち―人口減少、無関心、担い手不足を乗り越えて』第一法規、2019年、15頁。

35　「『自分ごと化会議』のすゝめ」。ただし、括弧内、引用者補記。

36　大谷怜美「全国初！住民団体主体の『原発を「自分ごと化」する』プロジェクトが始まりました！！」『構想日本メールマガジン』No.885、2018年11月15日

（３）個人的前史

僕が関わるようになった元々のきっかけは、大谷との出会いである。初対面は同年３月７日。用件は専ら僕が顧問を務める学生サークル[37]に関わることだった。JGKのことは別れ際に立ち話をした程度だったと思う。僕自身、ミニ・パブリクスに関心があったし、かつてカナダBC州の「市民議会（Citizens' Assembly）」（以下、CA）の研究もしていた[38]ので、それに関する話をしたかもしれない。が、はっきりした記憶はない。はやい話、このときの僕にはまだ他人ごとでしかなかった。それからしばらくして大谷からFacebook（以下、FB）でメッセージが届く。「JGKのことで話がある、ついては福嶋とともに面会したい」と。４月28日、行きつけの太助珈琲屋で会った。いきなり「共同代表で」という申し出にはたまげたが、即、快諾した。理由は主に三つある。

まず、率直にワクワクした。無作為×住民主導×原発…と聞いて興奮しないはずもない。福嶋の存在がそれに輪を掛けた。彼とは初対面である。が、行政研究者であればその名を知らない者はいないだろう。僕自身、私淑といえば大袈裟かもしれないが、特に我孫子市長時代の活躍に目を見張っていたし、著作もいくつか読んでいた[39]。そんな氏からの直の依頼、意気に感じないわけがない。

次に、教育研究上の関心からしても、ど真ん中ストライクだった。のちに僕は、JGKの公式ブログにこう書いている。「『遠い』（と思われている）問題に関心が集まるようにするにはどうしたらよいか、『高い』参加ハードルをいかに下げるか、価値観や立場の『違い』をどう乗り越えていくか。実はこれら、僕自身、研究者・教育者として、長らく思索してきた『問い』…（で

37　「ポリレンジャー～若者の手で政治をよくし隊！」という。なお、ここでの面会は直接的には、大谷の所属するユニット「ななむすび」との協働事業「憲法改正国民模擬投票PJ」として結実し、2018年度、彼女とは――JGK共同代表同士というだけでなく――同サークル顧問としても約一年間、活動をともにすることとなった。

38　参照、拙稿「市民による診断と行政統制－まちドックと市民議会（Citizens' Assembly）を手がかりに」『地方自治職員研修・臨時増刊号』vol.43,No.600、2010年。

39　例えば、『市民自治の可能性―NPOと行政我孫子市の試み』ぎょうせい、2005年。

あって、JGKが）…それへの一つの（実験的・展望的）『答え』」[40]である、と。事実、かかる関心から、かつて自ら（いずれも一日限りながら）出雲市と飯南町で無作為抽出型の会議を実践したこともあった[41]。

三つ目の理由は、むしろ懸念（余計なお節介？）と言った方が適切かもしれない。関係者のほとんどは“脱”原発志向である。「運動」してきた人も少なくない。果たして「中立」的な運営ができるのか。大谷と立ち話をした時から気がかりであった。しかし、だからこそ自分の参画に意味があるのではないか。原発関連の「色」のついてない（はずの）僕が関わることで多少は「偏り」が中和されるかもしれない。いや、そうすべきだ。不遜にも緩衝・監視役を自任したのであった。

２．本史

（１）実行委員会

５月30日、いよいよ実行委員会が発足する。ここでまず「次第」に注目しておきたい。議題に「『自分ごと化会議』in 松江の概要の再確認」とある。「“再”確認」である。つまり、これから検討を開始するというのではない。実際、会議は爾後すぐに「具体的取組み」として、抽出や発送作業、基調講演者等の選定など実務的な審議に入る。すなわち、テーマが原発であることを含め本PJの大枠は既にこの時点で決まっていたのである[42]。改めて遡れば、さきの大刀洗訪問時に構想日本と目線の会が打ち合わせをし、それを受けて３月10日には「松江市『自分ごと化会議』（仮称）の進め方（案）」というペーパーが作られている。そして実際にも、そこに描かれている「具体的

40　「政治、AKB、そしてJGK」（2018年８月29日、前掲注４ブログ）。

41　出雲市は2011年７月24日。飯南町は2014年３月17日。いずれも、自治（まちづくり）基本条例の策定過程において、である。

42　時間的には、住民協議会の実施が先でテーマは後から選ばれた。つまり原発ありきではない。なお、発案者の福嶋によれば選定理由は以下の通りである。そもそも誰もが知っている、行政だとまず取り上げない、脱原発は仲間内だけで議論し推進派も自分たちだけで粛々と進めている、だからこそ双方の意見を踏まえ普通の市民が議論することに大きな意義がある。

な流れ」、ほぼその通りに進んだ。逆に言えば、これがあったからこそ11月の協議会開始に間に合ったとも言える。

さて、この日、実行委員会の前には記者発表を、後には「ミニ勉強会」を行った。講師は３人。伊藤は構想日本での実績と経験から、福嶋は人口減少社会における地方自治のあり方から、僕はCAを題材に、それぞれJGKの意義を説いた[43]。一般からの参加者はさほど多くなかったが、（僕には初対面の人も多かった）スタッフの鼻息と会場の反応からしっかりとした手応えを感じた。わが意を得たりというべきか、参加者からはこんな意見が出た。「大阪都構想の住民投票（2015年）の時にこういった仕組みがあれば結果は変わっていたかもしれない」。なお、この時の一般参加者の一人Ｇがのちに「当選」するという奇跡がおこる。

（２）無作為抽出

委員会が発足すれば、最初の大仕事は無作為抽出である。行政ではない僕らには住民基本台帳は使えない。選挙人名簿が利用できることはわかっていたが、どうやらかなり面倒そうである。ここで面目躍如な活躍を見せたのが自治まつえのＡである。彼の仕切りのもと概ね以下の作業を行った。まず、松江市選管に対し「調査研究」目的[44]の利用申請をした。具体的な書類は「閲覧申出書」と「調査研究の概要・実施体制を示す資料」である。結果、許可を得ることはできたが認められているのは「閲覧」だけであって、コピーも写メも禁じられている。人海戦術をとらざるを得ない。そこで構成団体関係者に呼びかけボランティアを募った。結局、学生も含めたのべ22名が協力してくれることとなり、おかげで2217件もの名簿の書き写し自体は午前中にすますことができた。ただし、その後改めてパソコンに入力しなければならず全てが終了したのは夜、およそ10時間を費やしたことになる。率直に、いま

43　この日の様子は動画が一般公開されている。https://www.youtube.com/watch?v=0KN44vdAUaE
44　参照、公選法第28条の３。

少し使い勝手がよくてもよさそうなものである。もっとも、松江市選管は作業スペースが比較的広く、つまり一度に比較的多くの人数で作業できるため、まだマシな方らしいが…。

【写真１】無作為抽出作業@松江市選挙管理委員会

それはそうと、なぜ2217人なのか。基点は協議会参加メンバーを20人と想定したことにある。つまり、それだけの人が応募してくれるには何人に声をかければいいかを計算した。テーマは原発。多くの人に忌避される可能性が高い。主催も「得体の知れない」住民団体である。そこで、構想日本が手掛けてきた無作為抽出[45]の応募率で当時最も低かった三原市（0.9%）に依拠して、せいぜい１％であろうと見込んだ。松江市の人口はおよそ20万人。１％は2000人である。では、217人のズレは何か。端的に作業上の便宜である。具体的には、松江市選挙人名簿の様式（投票区ごとに分けられ、１頁に50人

45　先述の通り、大きく二種類がある。住民協議会のメンバーと事業仕分けにおける市民判定人である。なお、当時（2018年３月現在）の応募率は、前者が平均3.7%（最高値9.3%、最低値1.5%）、後者が平均5.0%（最高値12.8%、最低値0.9%）であった。この両者を通して最低の三原市を判断基準としたわけである。参照、構想日本「事前勉強会」資料（「行政への住民参加の先進事例紹介」）2018年９月２日。

が記載）に関わる。有権者数約16万9000人を2000でわると約85人おきに抽出することになるが、それでは（85番目、170番目、255番目…となり）作業効率が悪い。そこでキリのよい75人に１人としたのである（有権者数を75で割ると2217に近くなるはず）。こうすることでページの真ん中と一番下に目をやれば済むことになる。

（３）JGK26の誕生

選管での以上の作業は７月２日のこと。それから諸々の準備におよそ一ヶ月を要し発送にこぎつけたのは８月３日である。そうなると僕らの関心はどれくらいの人が応じてくれるかに移る。締切は８月25日と９月４日とした。二段階にしたのは応募状況次第では早めに二次抽出しようとしていたからである。実行委員会がやや弱気だったことがわかる。正直言えば、僕自身はもう少し楽観的であった。かつて自ら関わった出雲市が1.6%、飯南町が約３％…。条件は有利不利あってそう変わらないだろう。さすがに１％を切ることはないのではないか、と。しかし甘かった。参加表明者はお盆を過ぎた頃で５人、第１次締切時点（正確にはその数日後）でも13人にすぎない。誰もが二次抽出を覚悟した。ところが幸いにも、９月７日に20人を達成（翌日に１人加わり、結果的に21人）し、Ａがのちに「重いなぁ」と述懐する二度目の抽出作業は何とか免れたのである。

ここでの最大の立役者は大谷である。一次締切の少し前から電話作戦を敢行。募集と同時に実施した「島根原子力発電についてのアンケート」[46]を頼りに、いわば脈あり[47]の回答者に個別に働きかけたのである（聞くところによると「宝くじが当たったみたいなものです！」と口説いたとか…）。また、９月２日に開催した「事前学習会」も一定の効果があった。これはもともと、「当選」したけれども逡巡している人の背中を押すことを目的の一つ

46　本稿「おわりに」参照。
47　ただし彼女の恣意に委ねたわけではない。実行委員会として、当該アンケートへの回答をもとに一定の客観的基準を用意した。

としていた。嬉しいことに、まさしくそんな３人がこの学習会に足を運びその結果として参加を決めてくれたのである。なかには「政治的なものかな？と思っていたけど、今日のお話を聞いてそうではないとわかりました」との声もあった。蛇足ながら、タイミングも味方してくれたのかもしれない。中電が島根原発３号機の新稼働を求めて原子力規制委員会に審査申請したのが８月10日だったからである（その前提としての島根県知事の事前了解が７日）。応募の後押しになったかどうかは定かではないが、島根原発に改めて注目が集まったことは間違いない。

ところでJGKは26人いる。残り５人は島根大学の学生である。こちらも無作為に近い形[48]で抽出した。参加が学生の学びに資すればとの思いから僕が提案、それに大谷が「香川県三木町のように…これからの世代に…広がり面白いのでは」と応え、そして伊藤が自らの経験から「議論が建設的になる傾向にある」と太鼓判を押してかなったものである。もっとも、結果的には参加率も低かったし、実際の効果は定かではない。しかし、後に実施されるアンケート[49]によれば、５人全員がJGKについて「満足」。理由としては、自分自身にとってプラスになったがほとんどであった。

（４）本番

役者は揃った。いよいよ協議会の開催である。それまでの２ヶ月もまた準備で大変だったが（あとで一端には触れるとして）それは割愛する。まずは全体の流れを概観しておこう。図表２ の通り、およそ月１ペースで都合４回会議を開催した。ざっくり言えば、JGK26が専門家も交えて学び、互いに議論し、その結果を最終的に提案書としてまとめることになる４か月間である。

48　よく知る学生から５人を選出することは比較的たやすい。しかし、それではJGKの趣旨に沿わない。詳細は省くが、大学の名簿が使えないなか、それなりの工夫をして選定したところである。

49　本稿「おわりに」参照。

【図表２　協議会の概要】

第１回　11月11日　13時30分～17時　［参加者数］JGK26：18人　傍聴者：84人
１．基調講演：「原発を考えるために必要な視点～科学によって問うことはできるが、科学によって答えることができない問題群」 谷口武俊（東京大学政策ビジョン研究センター教授） ２．問題提起：島根原発への考え方 長谷川千晃（中国電力電源事業本部島根原子力本部副本部長） 土光均（さよなら島根原発ネットワーク 共同代表） 石原孝子（松江エネルギー研究会代表） 手塚智子（市民エネルギーとっとり代表） ３．全体協議（コーディネーター：伊藤）
第２回　12月９日　13時30分～16時30分　［参加者数］JGK26：19人、傍聴者：51人
１．前回の振返りと第２回の流れの説明（説明者：伊藤） ２．第１回問題提起者（アドバイザー）からの発言及び意見交換 ３．全体協議（コーディネーター：伊藤） ４．「改善提案シート」への記入
第３回　１月13日　13時30分～16時30分　［参加者数］JGK26：17人、傍聴者：46人
１．前回の振返りと第３回の流れの説明（説明者：伊藤） ２．話題提供「松江市の今後の人口推移と減少社会の考え方」（説明者：福嶋） ３．話題提供「諸外国の原子力政策動向」 木村謙仁（日本エネルギー経済研究所 戦略研究ユニット 原子力グループ） ４．全体協議（コーディネーター：伊藤） ５．「改善提案シート」への記入
第４回　２月24日　13時30分～16時30分　［参加者数］JGK26：15人、傍聴者：66人
１．これまでの振返りと第４回の流れの説明（説明者：伊藤） ２．改善提案について協議（コーディネーター：伊藤） ３．「意見提出シート」への記入

記念すべき初回は11月11日。（ポッキーの日ネタがややスベったことはさておき）主催者代表として僕は、概ね次のような開会挨拶をした。「今日は二つの意味で歴史的な日となるであろう。第一に、ここ松江ではタブー視されてきた原発がテーマとされていること。第二に、無作為によって選ばれた『ふつー』の市民が集まったこと（かつ、この企画が住民の手になるということ）。すなわち、これは、『民主主義』の新しいツールを提起するもので

あると同時に、『新しい民主主義』を模索する『実験』である」。なお、これを考えるにあたっては、CAのオープニング（2004年１月10日）におけるジャック・ブラニー議長の辞[50]を強く意識した。正直に言おう、一部はパクっている（*This day indeed is historic and we — all of us here — are all part of that history.*）。

【写真２】問題提起@第１回協議会

さて、会の実質的なプログラムは谷口による基調講演に始まる。一つ一つの内容はなかなか難しかったが、「科学によって（問うことはできるが）答えることができない」原発問題は結局のところ社会の価値選択の問題であるということ、したがって多様な利害関係者による対話が重要であるということ、そんな（まさにその後の基調となる）メッセージを僕らは受け取った。続いて、原発に賛成する立場、反対する立場ぞれぞれ２名から問題提起があった。そこでは、原発の基本的な構造、環境面での優位性、脱原発の必要性、代替としての自然エネルギーの可能性等が語られた。最後は協議参加者による全体協議。自己紹介と感想程度ではあったが、JGK26（この日は18人）

50　https://citizensassembly.arts.ubc.ca/public/extra/blaney_speech.xml.htm

一人一人の珠玉の発言にスタッフ全員が確かな手応えを感じたところである。と同時に、原発問題には付き物ともいうべきヤジや冷やかしなど不規則不穏当な言動が一切見られなかったことに安堵を覚えた。なお、この雰囲気はその後の協議会でも維持されることとなるが、そうせしめた要因については別稿[51]で検討する。予め一点あげるとすれば、最も効いたのは福嶋の発言であろう。「ヤジは絶対になしでお願いしたい。今日のヤジは、意見を言っている人へのヤジではなく、『民主主義へのヤジ』だ」。この瞬間、会場がピりッと引き締まったことはいまなお肌が覚えている。

師走開催の第２回は、前回の問題提起者（今回はアドバイザーと呼ばれた）同士による意見交換があったあと、その４人も交えてJGK26（この日は19人）間で全体協議が行われた。俎上にのぼった論点としては、例えば、電力と地域経済との関係、廃炉・賠償も含めたコスト、核廃棄物処理の問題、再生可能エネルギーのリスクや代替可能性等がある。そんななか、コーディネーターの伊藤が特に注目したのが「時間軸」である。協議終了時にはこんな「宿題」も出された。「（ひとまず原発やエネルギーとは切り離して）50年後、自分はどうありたいのか」。

かくして第３回は、くだんのテーマを巡っての協議となった。まず、そのための話題提供として福嶋が「松江市の今後の人口推移と人口減少社会の考え方」について、ナビゲーターの木村が「諸外国の原子力政策動向」について語った。つづく全体協議では、午前中の島根原発見学を受けての率直な感想から専門家顔負けの提案まで、JGK26（この日は17人）の発言はますます「キラキラ」[52]していた。とりわけ人々の注目を最も集めたのはこれだろう。「（停電の多かった50年前）、不自由だったけど不幸ではなかった」[53]。

51　前掲注12。

52　当時、JGK26の堂々たる姿や心に響く発言を仲間内で（あるいはブログでも）よくこう表現した。

53　なお、この声は原発に対して否定的な立場から発せられたものであるが、協議においては、原発視察により「感化された」と述べる者、停電による命の危険を懸念する向き、温暖化対策の点から原発の意義を認める意見なども見られた。

【図表３「改善提案シート」サンプル】

第３回自分ごと化会議 in 松江　改善提案シート

名前：

（記入例）

課題	原発についての全体情報が市民に伝わっていない。	
改善提案	（だれが）	（何をする）
	個人（私）	・原発に関するホームページなどを見て知る努力をする。 ・原発に賛成の人と反対の人双方の意見を聞く。
	地域	・自治会などで学習会を開く。
	中国電力	・原発の仕組みやリスクなどについて、市民にわかりやすく伝える。 ・行政に働きかけて市民と対話する場を作る。
	その他民間企業やNPOなど 新聞社	・賛成側と反対側の対立構図ではなく冷静な報道を行う。
	市・県・国など行政 市	・市民が原発のことを考えられるような場（自分ごと化会議など）を多く作る。

課題		
改善提案	（だれが）	（何をする）
	個人（私）	
	地域	
	中国電力	
	その他民間企業やNPOなど	
	市・県・国など行政	

自由記述欄

そして最終回。議題は勿論「提案書（案）」である。案は、それまでの協議および第２回・第３回終了時にメンバーから出された「改善提案シート」（図表３）をもとに実行委員会が作成した。その過程については後述する。協議は、原発問題に伴う各種の「不安」（避難計画や核廃棄物等）とその解

消（電力会社との信頼関係、政治行政との関わり等）を中心に展開された。そして最終的には、大きな異論もなくほぼ原案通りに承認されることとなった。ところで、そういった議論の中身もさることながら、僕らスタッフが特に惹かれたのはJGK26（この日は15人）の変化である。例えば曰く「最初はこんなに興味、関心をもって勉強するとは思っていなかった。自分自身に驚いている」。図書館に通い詰めたり、エネルギー関連の勉強会に出たり、なかには、再エネのことで東京都庁まで電話した人もいた。

【写真３】JGK26による協議@第４回協議会

３．舞台裏

（１）具体的工程

先にみた通り、JGK全体の流れは僕が参加する前にはもうほぼできあがっていた。とはいえ、それは大枠であって、細部（と呼ぶには重要なことも多いが）は走りながら、そして勿論それこそ熟議しながら詰めていったのが実情である。そもそも日程からしてぎりぎりまでフィックスされなかった[54]。また、第２回協議会には１回目の問題提起者が再び登壇するのだが、これは当初予定していなかったことであった。もともとは、第２回の（外部専門家なしの）協議において出てくるであろう意見や質問をまとめ、問題提起者と文書でやりとりしたものを第３回に活用しようとしていた。ところが、初回の全体協議終了間際にJGK26の一人から問題提起者がお互いどう考えるのか知りたいとの声が出たのを受け変更となったのである。加えて、「50年後…」という第３回協議会の中心的テーマも、既に述べた通り第２回において「時間軸」に参加者の関心が集まったことを受けて設定されたのだった。つまり、最初から論点が決まっていたわけではない。文字通りシナリオなし落としどころ未定だったのである。因みに、第３回協議会の午前中に行った島根原発見学も、実行委員会のなかで話題には出ていたものの具体的な予定にはなく、のちに中電からの申し出を受けて実施されたものである。

（２）出演交渉

外部専門家の存在と人選は、専門的知見からの情報提供という意味ではもちろん、中立性の担保という点からもとても重要である。だからというべきか、その交渉は一筋縄ではいかなかった。まずは原発反対派。こちらは「運動」つながりもあり、いくらか楽観視していた節がある。実際、手塚からは比較的はやい時期に承諾を得た。しかし、意中のもう一人からはにべもなく断られた。「原発に中立はない。基調講演者には主催者の色が出る。その

54　最大の要因は、後述するように外部から招く専門家がなかなか決まらなかったことによる。

候補者[55]は推進派ではないか」と。厳密な意味での中立があり得ないとしても、賛成、反対だけではない多様な立場があるとの認識に立つ僕らとしては誠に残念であった。と同時に、頑なな「反対」運動の限界を再確認した気もした。ともあれ、そこで白羽の矢がたったのが土光である。「さよなら島根原発ネットワーク」の共同代表で差止訴訟にも関わっており、専門性に問題はない。ただ、彼はその時JGK実行委員の一員でもあった。そのため（つまり中立性に疑念を持たれることを避けるため）まもなく実行委員会から脱会してもらうことが決まった。

当初より困難を覚悟していたのは賛成派の方である。特に中電にはほぼダメ元で交渉に臨んだことを覚えている。８月17日、Mと僕とで出かけた。案の定、随分と警戒された（感がある）。先方の手元には、大学のHPからと思しき僕の情報が印刷されておかれているし、会話からは僕の個人的なFBまで予習されたであろうことが推察できる。そして、そもそもJGKとは何か、何が狙いか、一過性のものか、なぜ原発なのか、提案はどうするのか、コーディネーターはどんな人か等々、矢継ぎ早に様々な質問を受けた。案の定、なかでも「中立」かどうかが最大の関心事のようだった。ただ、こちらも負ける(？) わけにはいかない。懸命に応えた。結果、僕はその日の実行委員会メーリングリスト（以下、ML）にこう報告している。「全体的な感触としてはまずまず」と。それからしばらくして再訪の要請があったため、僕らなりに交渉材料を用意したうえで８月30日に向かった。改めていろんな意見や要望を頂いたが、最終的にはその場で参加の言質を得ることができた。心底ホッとした。

賛成派のもう一人もスムーズにいったわけではない。当初、エネルギー問題の講師派遣をしている機関に依頼。が、「（JGKの）趣旨が基準と異なる」として断られた。その関係機関にあたり候補者として浮上したのが「松江エネルギー研究会」代表の石原である。偶然にも僕はかつて（原発とは関係が

55　この時点での最有力候補はまだ谷口ではない。また、この批判を受けて候補に変更を加えたわけでもない。

ない）市民活動絡みで仕事をともにしたことがあった。当然、大役がまた降りかかる。９月５日、吉岡とともにお城近くのお宅を訪問。抹茶と和菓子の松江流おもてなしを頂きながら長い時間話したが、参加にはかなり躊躇っている様子だった。主なワケは彼女のトラウマにある。聞けば、かつて安対協（原子力発電所周辺環境安全対策協議会）の場で原発反対派の人達からひどいヤジや怒号を受けたのだという。僕らはむしろ、ならばと、JGKの趣旨や自分たちのスタンスを丁寧に伝え、協議の場を荒らさないことを約束した。結果、「求めていることは同じで、安心しました」との返事をもらうことに。ここ松江で、原発にも環境にも詳しく肯定的な立場を公に表明してくれる在野の人なぞ石原以外にいないだろう。本当に有り難かった。

（３）提案書づくり

提案書は「自分ごと化会議からの９つの提案～原発を自分ごと化する～」と題されている。図表４にその表紙と「９つ」を掲載しておく。ただし、ここでは内容には立ち入らない。一点のみ確認しておけば、原発の稼働・再稼働に賛同するものとも廃止を求めるものともなっていない。双方の立場、いや、より多様な立場からの様々な意見が載せられたものである。

しかし、これがなかなかの難産であった。最終回の協議会（２月24日）に示されることになる「提案書（案）」は、伊藤を中心とした構想日本の東京チーム（理事の福嶋を含む）が起草した。それをベースに、主にMLを使って全スタッフで議論して詰めていく。素案が最初に提示されたのは１月25日の実行委員会。そこで基本的な方向性を確認するとともに、JGK26には事前配布すること、そのため印刷を２月18日に行うことを決めた。ところが15日になり伊藤からメールが入る。当日配布にしたいと。これまでの住民協議会でやってきたまとめ方を変更するのだという。なるほどテーマも別格、情報量も膨大である。印刷も本番三日前に変更された。が、結果的にはこれも果たせなかった。

メンバー誰しもが多忙で各々別の仕事を抱えながらである。しかも時間が

ないというのに誰も手も抜かず遠慮もせず修正を求め提案も行う。特に21日からの三日間はMLが「炎上」した。僕に限って言えば、21日の18時前に構成自体に大幅な変更を迫るような提案をしている[56]。また、翌日22時頃に僕が送ったワードファイルの「コメント」数は60ほどもある。それに対して伊藤から、日付が変わった夜中２時半頃に一つ一つに丁寧なレスポンスがついたファイルが返ってくるといった調子である。東京チームはほぼ徹夜状態だったという（実は僕も、その数日ほとんど寝ていない…）。そして、最終的に構想日本から「提案書（案）」がMLに送られてきたのは、何と24日の午前０時ちょうどだった（メールの受信時刻はホントに0：00 ！）。朝にかけて印刷、会場に届いたのは会議開始２時間前である。

【図表４「提案書」表紙および９項目】

56　これは伊藤の「拘り」により、ほぼ却下された。勿論、僕も納得（というより感服）のうえである。詳細は省くが、その拘りがよくわかる文章を引用しておく。「話す言葉には感情がとても表れていたとしても、紙に書くとそれが見えず丸くなってしまう人が多い。だから、参加者に書いてもらった『改善提案シート』のほかに、議事録や私自身の記憶から、書いた人の文字の背景に思いを巡らせて趣旨が変わらないように文字を付け加える。ただし、付け加えるけれども原文の『におい』を消さないことを心掛けた。いわゆる『有識者』ではない住民が生活目線で考えた言葉の『におい』には説得力があると感じている」。「原発問題の解決の前提は原発を『自分ごと化』すること～『自分ごと化会議 in 松江』」『YAHOO ！ニュース』2019年３月19日。

提案	1. 原発を「誰かが考える問題」ではなく「自分の問題」として、多くの人が関心を持つようにする。
提案	2. 「自分たち（子や孫も含めて）はどう暮らしたいのか、松江市はどんなまちであってほしいか」に思いを巡らして原発のあり方を考える。
提案	3. 島根原発の見学など、市民が分かりやすい原発の情報に触れる機会を増やし、一人一人が判断しやすい環境をつくる。
提案	4. 原発によって松江市にどの程度の経済効果があるのか、具体的に検証して市民目線で考える。
提案	5. 自分たちの生活の中で、エネルギーの使い方を見つめ直し、無駄をなくす。
提案	6. エネルギー源の一層の多様化や、地域循環型の電力システム（エネルギーの地産地消）に向けて研究し、その成果を市民へ知らせる。
提案	7. 放射性廃棄物の最終処分場について、情報の出し手（国や電力会社）と受け手（市民）のコミュニケーションを図り、他人事にならないようにする。
提案	8. 仮に原発事故が起きた場合の被害シミュレーションや、避難計画・経路の図面を今まで以上に徹底する。私たち市民も知る努力をする。
提案	9. この会議での私たちの意見と、議会・行政の考えとの共通点や相違点を知るため、市議会を傍聴したり国のエネルギー政策の動向をチェックしたりする。議会・行政は多様な市民の意見を真剣に聴く。

なお、先に述べた通り、この原案は協議会で特に異論なく承認された。とはいえ、その場でも様々な意見が出され、また終了時には「意見提出シート」も出されている。したがって、それらを最大限反映させる形で再び実行委員会の側で加筆修正を行った。それを３月７日にJGK26に送り確認してもらった後、完成したのが３月13日である。JGK26の一人はメールでこう寄せてくれていた。「さすが、だされた意見はどんな意見でも大事にするとの趣旨が大切にされていることを強く感じました」。そして翌日の記者会見で一般にお披露目されたのである。

４．祭りのあと

（１）報告と提案

提案書を完成させた後、僕らは「報告会」の準備にかかった。もともと予定はなかったものの、各方面からの様々な支援へのお礼を込め、また「自分ごと化」の拡散を願って企画したものである。４月21日、「くにびきメッセ」

601会議室にJGK26からの11人も含め約70名が集まった。実はこの会場、「組織的前史」にてふれた伊藤・福嶋講演会が開かれた（つまりは山陰でおそらく初めて公の場で住民協議会が話題にされた）ところだという。さすがは縁結びの地！？

５日後、JGK26の２人を含む７人で中電に出向いた。提案書を届けるためである。何とも印象的だったのは問題提起者として登壇した長谷川の表情である。新田によれば、住民説明会ではこんなに和やかな顔は見せたことがないとのこと（「そういう当人もではないか」との声も聞かれたが…）。しかも「住民とのコミュニケーション、特に説明会のあり方を再考したい」旨の発言まであった。当初ダメ元で門を叩いたことが思い出され感慨一入だった。

【写真４】島根県知事への「提案書」提出

それから６月21日に経産省、７月16日に松江市、そして９月６日には島根県に提案書を持参した[57]。世耕大臣（当時）は、「どうしたら怒号やヤジが飛

57　県が最も遅くなったのは、４月に知事選挙が行われ、しかも保守分裂選という混乱があったことが影響している。

ばない環境で意見交換ができるのか」と強い関心を寄せたという。丸山知事からも次のような反応があった。「賛成反対に固執しがちな政治的議論の場において、双方がそれぞれの意見の理解に努めつつ、建設的な議論をする場は評価できる」と。そして松江市はといえば…。実は当初ひと悶着あった。松浦市長の方針として原発関連の市民団体とは会わないというのである。これ自体どうかとは思うが、それはさておき最終的には（個人的には交渉を担当した福嶋の「柔らかい恫喝？」も効いたとみているが）、JGKは「フラットな議論をされ、全国的にも注目され、貴重な提言をまとめられた」として面会OKとなった。同席者によれば「最初は、緊張した面持ちだった市長も、懇談する中でニコニコ笑顔」になったという。

（２）第２期へ

報告会後もしばらく実行委員会は続く。主な議題は、第１期の「終活」と次に向けてである。いったんは解散した方がよいとの案も出たが、連続性や外からみた場合のわかりやすさ等に鑑み、委員会自体は継続することにした。もっとも、PTA等でもそうであるように構成メンバーや役職は変わり得る。事実、2019年９月29日に発足する第２期では、大谷が共同代表から事務局長となり新しく後藤が代表に加わった。福嶋と僕は居残りである。第１期に事務局を担った目線の会の新田と吉岡は退いた。個人的には残念で仕方がないが、もともとの拠点・米子市での開催を目指すという。各地に広がることを祈りたい。

ところで、ここで特筆すべきはくだんの後藤が第１期JGK26の一人だったということだろう。抽出前の「ミニ勉強会」に出席しその後「当たり」を引いた、その人（既出「ミニ勉強会」参加者のＧ！）である。新実行委員会には他に元JGK26が４人名を連ねている。彼／彼女らはOBOG会のメンバーでもある。協議会も３回目頃になると「このまま別れるのは惜しい」という声が出てきていた。それを受ける形で最初は（第１期）実行委員会が音頭をとって「打ち合わせ会」を開催、そこに集まったメンバー数人が中心となっ

てOBOG会を設立したのである。つまり、OBOGの一部（４人）が第２期JGKの実行委員も務めているというわけである。ともあれ、侃々諤々の議論を経て「自然エネルギー」に第２期テーマが決まったのは、越年しての１月11日のことであった。

（３）資金と学生

二点、補足しておこう。まずはおカネ。図表５の通り、幸いにも黒字で終えることができた。収入の７割強は寄付である。ひとえに多くの方々から支援をいただいたおかげ、当事者としては感謝しかない。他方、いくらか無理があったのもまた事実である。例えば、クラウドファンディング。特にall or nothing方式の場合、終盤往々にして「身内」が自腹を切ることは、知る人ぞ知る。今回もそんな事態が見られた。そもそも見通しが甘かったところもある。当初は全体予算を180万円で組んでいたから結果的には50万円ほど超過したわけである。報告会終了後、すなわち解散まで間もない実行委員会でも20数万円の赤字予想に一種の警告もなされていた。しかしその後、解消策の具体的な議論も取組みも十分できず、最終的には特定の者が負担することとなったのである。別のメンバーからは後日こんな声も出ていた。「やらなくちゃいけないと思った人が責任をとった。その数字をみたら、ものを言っていいんだろうか、って気になる。肩身が狭い」。次に活かすべき反省点であろう。

【図表５　第１期JGK決算書】

収入	項目	金額	備考
	クラウドファンディング支援金	916960	手数料を引いた額
	一般寄付	778926	
	住民目線の会・山陰負担金	565102	
	その他収入	58060	報告会参加費、冊子売り上げなど
収入合計		2319048	
支出	項目	金額	備考
	郵送費	231544	参加案内郵送費（返信を含む）173,636円
	印刷費	83697	リーフレット印刷、資料印刷など
	会場費	237048	第1回～第4回協議会開催費134,100円、実行委員会会場費
	雑費	127784	印紙代、無作為抽出弁当代など
	郵便振替手数料	3200	
	第1回	144880	講師謝礼、パネリスト謝礼、託児料、参加者交通費補助
	第2回	42440	アドバイザー謝礼、託児料、参加者交通費補助
	第3回	84720	託児料、参加者交通費補助
	第4回	14940	託児料、参加者交通費補助
	実施報告会	12420	託児料
	クラウドファンディング返礼品・提案書	110, 003	
	構想日本経費	1174296	旅費
支出合計		2266972	
残金		52076	

【出典】JGKブログ（2019年７月11日）

もっとも、支出に大きな無駄があったとも思われない。例えば、最も大きい支出は構想日本経費であるが、これは文字通り実費（交通費と宿泊費）であって、本来（実行委員会構成団体でなかったならば）支払われるべきコンサル料は含まれていない。伊藤とその秘書的役割を務めたＮの貢献度からすれば格安とさえ言える。その他、印刷や郵送などにかかる費用は可能な限り知と汗と人脈により節約した。それでもやはり先立つものの必要性を痛感したところである。アドボカシー系の助成金が充実することを願わずにはおられない。

最後に、学生についてふれておこう。実践的教育者を僭称する者[58]として僕は当初より、このPJにいかに学生を巻き込むかに関心があった。そしてそれはスタッフの快諾を得て二つの形で実現した。一つは、既に見た通りJGK26のなかに学生５人が含まれたことである。二つはわがゼミ。2018年６

58　参照、拙稿（前掲注26論文）。

月８日に僕は、MLで「公式の位置づけ（あるいは肩書き）」をゼミにもらえないか提案している。理由はこうである。「まさに『自分ごと』意識が（相対的に）強くなる（ただのお手伝い意識が薄くなる）、成果についての達成感がより大きくなる、したがって、学習効果もより期待できる、シューカツ等で、ネタにしやすい」。メンバーからはすぐに快諾頂き、晴れて「学生事務局」と名乗れることとなった。その後、様々な活動に関わっていく。実行委員会への参加、無作為抽出や郵送等にかかる作業、学生５人の抽出、大学祭や「しまね大交流会」[59]での活動報告、会場設営、FB[60]での情報発信など、である。結果はどうか。JGKへの貢献についてはさておき、学生への教育的効果は大きかったように思う。例えばゼミ生Ｈは、本学「大学案内2021」[61]に「（JGKの活動を通じて）企画力や説明力が磨かれました」と寄せている。また、JGKを卒論のテーマに選んだＦは、卒業直前こうLINEしてきた。「JGKは４年間を代表する『教材』になった」と。

59　参照、https://www.allshimane.shimane-u.ac.jp/project02/。
60　https://www.facebook.com/jibungotokamatsue/
61　https://www.shimane-u.ac.jp/introduction/publicrelations/admission_pamph/

【写真５】行政学ゼミ生によるJGK実践報告@大学祭

おわりに―「検証」に向けて

「はじめに」で予告した通り、続編となる「検証」についてここで簡単に予告しておこう。ある事柄が成功したかどうか、また、どんな意味でどの程度そうなのかを判断するには、一定の規準が要る。即座に思い浮かぶそれは、当該PJの掲げる狙いであろう。その達成度で測るわけである。これを合目的的規準と呼ぼう。この点、JGKには大きく二つの目的があったとみてよい。一つは、PJの遂行それ自体である。今回は特に構想日本流の住民協議会では初めての市民主催であることに加え、タブー視されるテーマでもある。当事者としても無事に完遂できるか、実に気がかりであった。いま一つは、文字通り「自分ごと化」。これが意味するところは必ずしも明らかではないが、本研究では、少なくとも原発問題について、少なくともJGK26が、少なくとも関心なり認識なりを深めること、そしてできれば行動の変化が起きること、と理解しておきたい。

加えて、先述の通りJGKを「ミニ・パブリクス」の実践例と捉えるのであ

れば、その規範的基盤たる熟議民主主義論の枠組みのもとでも評価する必要があろう。とはいえ、通説的な規準が確立されているわけでもない。そこで本研究では、カナダの核廃棄物管理にかかる「国民協議」過程[62]を熟議民主主義的な観点から分析したジョンソンを手がかりにする予定である（図表６）[63]。

【図表６　熟議民主主義的規準】

規準	具体的な視点
①包摂	参加者はどのような人か、多様性は担保されているか
②中立性	協議の場は中立に保たれているか、不平等な扱いはないか
③情報アクセス	議論のための情報は十分か、それへのアクセスは保障されていたか
④相互尊重	自由に対話できる場となっているか、互いに理解しあっているか
⑤長期的視野	将来世代への責任は果たせているか、少なくとも配慮はみられるか
⑥合意	参加者間での共通理解はあるか、成果物の合意は得られたか

ところで、検証に使う主なエビデンスとして、複数のアンケートがある。それは、図表７の通り大きく２種類にわかれる。一つはJGK実行委員会によるもの、いま一つは筆者の手になるものである。前者はさらに三つに分類できる。第一に、無作為抽出による参加者募集とあわせて実施された「島根原子力発電についてのアンケート」である。これには、参加を承諾したJGKの21人（この時点でまだ学生はいない）とそれ以外の松江市民（228人）が回答している。第二に、協議会の度に――つまり都合４回――実施されたアンケートがある。すべての回においてJGK26・傍聴者それぞれが対象とされ

62　カナダでは、2002年から2005年にかけて、無作為抽出型の会議も含めて様々な対話の場が設けられた。参照、ジョンソン・ジュヌヴィエーヴ・フジ（舟橋・西谷訳）『核廃棄物と熟議民主主義－倫理的政策分析の可能性』新泉社。

63　彼女自身は５つ（Inclusion、Equality、Reciprocity、Precaution、Agreement）に整理しているが、ここでは彼女のいう「Equality」を②と③に分けた。また、一つ一つの内容についても筆者なりにアレンジを加えている。あわせて参照、西舘崇・太田美帆「合意に達しない熟議の価値－原子力エネルギー政策形成における熟議民主主義の到達点とは－」『論叢』第56号、2015年。

た。第三に、実施報告会でのアンケートである。JGKにも一般参加者にも区分なく同じ質問票が配られたが集計上は識別可能である。一方、筆者によるアンケートは、協議会終了後およそ１年後[64]に研究目的で実施したものである。対象はJGK26、厳密には事前に研究協力を約束してくれていた14人[65]と学生５人である。

【図表７　アンケート概観】

実施主体	名称	時期	対象	回答
JGK 実行委	島根原子力発電所についてのアンケート	2018．８．３～９．４	一般市民 JGK21	228人 21人
	第１回協議会「会議参加者」・「傍聴者」アンケート	2018.11.11	JGK26 傍聴者	17人 45人
	第２回協議会「会議参加者」・「傍聴者」アンケート	2018.12．9	JGK26 傍聴者	12人 27人
	第３回協議会「会議参加者」・「傍聴者」アンケート	2019．１.13	JGK26 傍聴者	17人 32人
	第４回協議会「会議参加者」・「傍聴者」アンケート	2019．２.24	JGK26 傍聴者	15人 48人
	実施報告会アンケート	2019．４.21	JGK26 傍観者	９人 33人
毎熊	第１期「自分ごと化会議 in 松江」に関する１年後アンケート	2019．１.26～２.11	JGK21 学生	14人 ５人

64　期間は、2020年１月26日から２月11日まで。グーグルフォームを利用。ただし、一人は郵送により対応した。

65　2019年７月４日、事務局を通じてJGK26に研究の協力依頼をした。それに承諾をいただいた14人である。その限りにおいて回収率は100%とも言える。